

「絵本の里をつくろう！」からの30年

けんぶち絵本の里を創ろう会

会長 下田 秀樹



剣淵町の「けんぶち絵本の里を創ろう会」

北海道北部、名寄盆地の南端に位置する剣淵町（けんぶちちょう）は、基幹産業が農業という、北海道で言えば「どこにでもありそうな町」です。現在、人口が約3200人というこの小さな自治体で、住民組織の「けんぶち絵本の里を創ろう会」が生まれ、来年6月に結成30年を迎えます。結成当初は、絵本などまったく似合わない、30代から50代の商店主や農家のおやじ14名でのスタート。「何とかして町を有名にして、人を呼び込みたい」という思いから始まった活動でした。当時の剣淵町は、道内でも「けんぶち？北海道にあるの？どこにあるの？」と聞かれるほど無名の町だったため、青年達は真剣に考えたのだと思います。

なぜ町を有名にするために「絵本でまちづくり」にしたのですか？とよく聞かれます。これは、1988年に開催した「まちづくり講演会」がきっかけでした。町の商工会青年部が講師に招いた銅版画家の小池暢子氏から、「日本人は金と物を大事に

するが、人と心、芸術を忘れているから世界で信用されない」と言われ、では芸術について学ぼうではないか、と出版社の編集長を紹介していただいたことが「絵本」との出合いの始まりでした。その方が剣淵に来町された際、「この町には南フランスのよう美しい田園風景が広がっている」と絶賛し、「こういうところに絵本とその原画を集めた美術館があればいいの」というお話を受け、「絵本の美術館をつくろう」と1988年6月、「けんぶち絵本の里を創ろう会」は結成されました。

「けんぶち絵本の里を創ろう会」から「絵本の里けんぶち」へ

絵本を知らないおやじたちは、まず町民と一緒に「絵本文化」を学ぼうと、絵本原画展を精力的に開催しました。町民の方からは、「絵本で飯が食えるか！」とお叱りを受けたこともありましたが、1989年竹下登内閣の「ふるさと創生資金」1億円交付の時は、当時の町長の理解を得て、交付金の半分を使って旧役場庁舎を整備し、原

画収蔵室、展示室などを設け、1991年8月に「絵本の館」を開館することができました。当時は寄贈なども含めて絵本の蔵書13000冊でのスタートでしたが、その後平成16年6月に、町の公民館図書室と統合して新築し、「剣淵町絵本の館」として開館しました。現在、絵本の蔵書は約4万冊で、施設全体の蔵書7万3千冊の半分以上を占めています。

また、今年度で27回目を数える「けんぶち絵本の里大賞」は、その審査方法が「剣淵町絵本の館」に来館し、応募された絵本を読んだ



現在の剣淵町絵本の館



旧絵本の館

回から、剣淵町をはじめとした機関・団体が「けんぶち絵本の里づくり実行委員会」を組織して主催し、現在では町を挙げての行事となりました。このように商工会や農業・福祉との連携や協力で、「絵本の里けんぶち」を冠した商品や活動が広がっています。

子どもも大人もみんな「絵本」

けんぶち絵本の里を創ろう会の結成当初は、絵本はお母さんと子どものためのもの、と思う会員も少なからずいました。だからでしょうか、いい歳をしたおやじたちが絵本の読みきかせをしている姿が、新しい試みのように報道されることがありました。

共働きが多い今の子育て世代は、男女関係なく絵本に親しみ、子どもに読みきかせたり、絵本を一緒に選んだりする親子がよく見られます。もちろん、孫に読んであげる絵本を探す大人も増えていきます。自



剣淵町絵本の館館内(えほんのへや)

方々に投票してもらおう」というユニークなものが、創設当時は、審査員を引き受けてくれる方が居なかったのもあり、このような形になりました。この賞は、1997年の第7



おはなし会のようす

分が子どもの頃に読んでもらった思い出の絵本、人気作家さんのデビュー作など、探している本は人それぞれです。

私の「お気に入りの絵本」

1冊」は、第1回けんぶち絵本の里大賞を受賞した『おばあさんのすーぷ』(絵・水野二郎、文・林原玉枝、女子パウロ会、1990年)で、森のおばあさんが、わずかなりのスーぷを森の動物達に少しずつ分け与えるという内容です。読み進むうちに自然と優しい気持ちにさせられ、「絵本というものは、これほど人の心を揺さぶる力を持つてい

るのだ」と感動した作品でした。

絵本は

短いページのなかに厳選された文と、作品の世界を鮮やかに表現する絵が一つになつて、人



けんぶち絵本の里大賞投票会場のようす

の心を豊かにしたり育てたりするものなのだと感じています。また、単なる「おはなし」ではなく、1つの芸術作品として完成されたものもあると思っています。会が結成されてからの30年の間で、「絵本学会」や「絵本専門士」、または絵本を専門に扱う施設など、絵本に関係するものが増えたように思えます。それだけ、全国的にも「絵本」が大切だと思われているのでしょう。

絵本の里づくりの今後

長年の活動を経て、今では全国的に「絵本の里けんぶち」を知っていただけのようになりました。「剣淵町絵本の館」の来館者は年間約32000人、また道の駅施設では、年間50万人以上の方に利用され、30年前の「剣淵を有名にしたい」という目標は達成されました。しかし、全国的な問題である人口減少はこの町でも深刻で、現在の3000人台を維持していけるかが課題です。今後も「絵本のまちづくり」を継続し、「剣淵町の町民として元気に過ごしていくために、次の若い世代を育てながら、新しい「お気に入りの絵本」を探そう」と思います。



剣淵の絵本の里づくりが映画「じんじん」に